



REGGIO CALABRIA 198

FROM THIS
THIS DANGEROUS BEGINNING
REGGIO CALABRIA...

The Year of Three

Ferdinando Frega

GILLETTE：3の年 — 第3幕

書類を審査し、新しい商業代理人のなかから誰を昇格させるかを決める時が来る。みんなが我先にとファイルをつかみに走るなか、私は4冊だけ取って読みはじめる。

中身はたいしてなかった—本物の経歴書というより、気ままな日記だ。だが、ここはイタリアであり、それでよかった。

語るに値するいくつかの話に、私は目を留めた。

ひとり目はカルタ氏。トイレットペーパーをつくる会社の委任を受けていると称し、新しい売り方を発明していた。すでに一流ブランドに忠実な客のところへ入っていき、自分の番が来ると、決め台詞を放つ。トイレットペーパーを売るのは簡単です—ケツがどこにあって、便所がどこにあるかを知っていればいい。

そしてこう続ける。これがケツで、あれが便所。で、紙はお買いになりますか。誰もが笑った。

不意を突かれた。全員の笑い声のなか、私は彼を昇格させるほかなかった。

次に来たのはプリンツィ・ジョヴァンニ氏。自家製の漂白剤を—トラックで—売ってきた男だ。コゼンツァ近くの川で義父と一緒にこしらえたもので、免許もなく、規制も一切なし。タンクに川の水を詰め、溶剤を加える。それが製品だった。それから、信用されるようにスーツにネクタイ姿で食料品店に入っていき、こう告げる。

おはようございます、奥様。私はプリンツヴァンニ&カンパニーのプリンツヴァンニと申します。次亜塩素酸ナトリウムを世界中にお値打ち価格で販売している多国籍企業でございます—サンプルを置いていってもよろしいでしょうか。

怯えた店主は尋ねる。すみません、それは何の製品ですか。

すると彼は答える。漂白剤です。

彼も昇格した。

33年が過ぎたが、私はいまだに考える。この2人のセールスマンは、本当のところどれほどの腕だったのかと—とりわけ2人目だ。どういうわけか、私の母である Gillette夫人まで口説き落としたのだから。

フェルディナンド